

保育評価のストラテジー：評価ツールの活用・展開とオリジナリティの発揮

話題提供 前田武司（金沢市・額小鳩保育園） 小尾麻希子（明石市立大観幼稚園）
保坂佳一（CHS子育て文化研究所） 提案・司会 埋橋玲子（同志社女子大学）

【企画の趣旨】

保育評価は今や保育実践の一部となった。既存のツールが活用されたり、さらにオリジナルな工夫を加えた独自の評価方法が生み出されたりもしている。また、評価作業は時に従来の業務を圧迫し、保育従事者に負担を強いることが珍しくない。そこで負担軽減化は大きなアジェンダである。これらの実践報告も含み、今後の保育評価展開の方略を考える。

【話題提供】

理想の保育を目指しての金沢エクステンション

額小鳩保育園 前田武司

『保育環境評価スケール』（注、以下スケール）を用いて実際の日本の保育を評価すると、実態と乖離した点がいくつか感じられた。その違和感の中でも特に重要なのは、保育の中で大切にしたい価値観、しかも日本の保育ではかなり大切な部分が抜け落ちているというものであった。そこで、スケールと現実の日本の保育の乖離を埋めるべく、新しい評価項目を追加作成することにした。作成の流れを以下に記す。

①評価項目の基礎となる、日本における理想の保育像を『年長児（就学時）の理想の子どもの姿』として明確化

②①の理想の子どもの姿を育てるために必要な保育環境（内容）を、保育所保育指針の保育内容（5領域）から選択

③②で選んだ保育環境（内容）とスケールの評価項目を比較し、不足していると思われる評価内容を新しい評価項目として作成

④③を使い実際の保育を評価し、評価項目を検証し、必要に応じて修正

以上のプロセスを何度か繰り返し、評価項目の精度を高めた。

この様な試みが、それぞれの保育所・幼稚園が掲げる理想の保育に近づく一助となれば幸いである。

明日の保育構築に繋がる「保育評価」の試み

明石市立大観幼稚園 小尾麻希子

保育者が日々の保育を振り返り、次の日の保育を構築する際、「保育評価」は重要な役割を担っている。筆者も保育者として、よりよい「保育評価」の在り方を模索し、実践してきた。しかしながら、時間的な制約があり、継続困難な状況に陥ったこともある。そこで、保育者が日々の保育の中で捉えた子

どもの姿と保育者の関わりについて、短時間に効果的に記述し、評価するチェックリストの作成を試みた。

<チェックリスト1>は、子どもの育ちを捉えることを目的とし、子どもの遊びへの参画スタイルを記述した。<チェックリスト2>は、子どもの育ちを保障する保育の在り方を探ることを目的とし、該当児に対する保育者の関わりについて記述した。これらのチェックリストの項目は、筆者のこれまでの実践研究から捉えられた「子どもの遊びへの参画スタイル」及び「保育者の関わり」を細分化して記述したものである。また、該当欄にチェックした理由を併記し、次の日の保育計画が具体的に浮かび上がってくるようにした。

保育現場から、明日の保育構築に繋がる「保育評価」の在り方を提案していきたい。

保育マネジメントの仕組みとして機能する保育評価

CHS子育て文化研究所 保坂佳一

保育士等が行なう自己評価は保育実践の改善が目的であり、保育士個々の自己評価を基盤に保育所あるいは組織全体の評価がなされ、結果として保育全体の質の向上に寄与する保育マネジメントの仕組みとして機能しなければならない。保育における評価では自己評価が基盤になることを考慮すると、とりわけ評価の信用性、すなわち「保育者個人が評価を行う為の十分な知識や技術等を有しているのか」そして「保育を評価するという体質（風土）と目的に合った適切で十分な評価方法が採用されているのか」が問題となってくる。

言い換えれば、評価そのものは保育の科学化であり、保育における科学化とは保育者が保育を学習していく態度そのものであることから、評価の信用性を担保することが保育マネジメントの仕組みを下支えする重要なプロセスになるということである。

評価が保育者を高め、保育者が評価することで保育が高まっていく。この相乗的、相互的關係性を両立した評価システムの創造が必要であり、同時にそれを活用する保育現場の意識向上が特に求められる。

（注）T. ハームス他著、埋橋玲子邦訳『保育環境評価スケール①幼児版』および『保育環境評価スケール②乳児版』法律文化社、2004年。